



TITLE:

千年王国を越えて: ムージルの『特性のない男』における〈別の状態〉の行方

AUTHOR(S):

大川, 勇

---

CITATION:

大川, 勇. 千年王国を越えて: ムージルの『特性のない男』における〈別の状態〉の行方. 研究報告 1986, 2: 14-51

ISSUE DATE:

1986-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134372>

RIGHT:

# 千年王国を越えて

—— ムージルの『特性のない男』  
における〈別の状態〉の行方 ——

大 川 勇

## は じ め に

1942年、亡命の地ジュネーブで突然の死に襲われる直前、『特性のない男』の「ある夏の日の息吹き」の章を書き進めながら、ムージルは次のようなメモを記している。「aZ問題の消耗した今、作家ローベルト・ムージルのモーターはもはや本来の中枢部を持っていない」。<sup>1)</sup>

aZ、即ち〈別の状態〉(anderer Zustand)とは、ムージル自身の言葉を借りれば、「測定・計算・検証という実証的・因果的・機械的思考」に支えられた「通常の状態」に対峙する「愛の状態、善の・世界離脱の・瞑想の・観照の・神への接近の・忘我の・意志喪失の・内省の状態」<sup>2)</sup>のことであるが、この受動的かつ神秘的なく別の状態こそは、『特性のない男』の、とりわけその第二巻の中心主題を照射する核概念であり、同時にムージル及び『特性のない男』に対する批判と共感の主要な対象とされてきたものである。例えば〈別の状態〉に対して「これまで最も根本的な批判」<sup>3)</sup>を行なったといわれる K. Laermann にとって、〈別の状態〉とはナルチシズム的「主体の接触不安」に由来する現実の生きた諸関係からの離脱であり、その結果生じる「対象喪失の熱狂的讃美」である。<sup>4)</sup>それは何よりもまず「魔術」(Magie)なのであって、この「魔術的思考」は現実の生において拒まれたものを呼び出すために用いられるのだ、と彼は言う。<sup>5)</sup> 〈別の状態〉の呪術的作用に対するこのような批判は、それ自体としては正しい洞察を含んでいるかもしれない。しかし Laermann に欠落しているのは、批判の対象である〈別の状態〉が作者自身によって作品内でどのように位置づけられているのかを問う視線である。Laermann の暗黙の前提を成しているのは、ムージルが〈別の状態〉を小説内で肯定的に措定しており、『特性のない男』の究極的目標もまた

その実現を描くことにあるという考えであるが、この前提こそは『特性のない男』の最終的構想をめぐる論争の最大の争点となったものであった。にもかかわらず、〈別の状態〉に対して表白されてきた批判と共感、おしなべて Laermann の前提を無条件に共有しているように思われる。

ここでその論争の概要を予め振り返っておけば、未完に終わった『特性のない男』の最終的構想については二つの対立する見解がある。一つは、〈別の状態〉の実現を求めるウルリッヒとアガーテの試みは「ある夏の日の息吹き」の章における神秘的な「庭」の現出で果たされ、小説もそこで終わる、それがムージルの意図した結末であるとする見解であり、もう一つは、その後も小説は進行し、兄妹の近親相姦が描かれる「楽園への旅」の章で頂点に達すると同時に〈別の状態〉の破綻が告げられるはずであったとする見解である。前者の見解を代表する E. Kaiser / E. Wilkins が自説の最も有力な根拠として挙げたのは、遺稿部第 47 章の冒頭部における Dr. 47 章から R. 47 章への改変であった。<sup>6)</sup> 兄妹が世間から引きこもって二人だけの生活に入ることが述べられる一文で、ほぼ同じ表現が踏襲されている中、一箇所だけ「二人は招待を全部ことわって」(Dr. 47 章)とあるところが「二人は旅に出ることを口実にして」(R. 47 章)へと書き改められているのである。ここにおいて、初期の構想としては確かにあった「楽園への旅」は最終的には「象徴としての旅」のレヴェルに移された、と Kaiser / Wilkins は考える。<sup>7)</sup> Kaiser / Wilkins にとって〈別の状態〉はあくまでも究極的到達点であって、破棄されるべき性質のものではないのである。しかしその後、上述の見解を反証する創作メモの存在が明るみに出され、「楽園への旅」が最後までムージルの構想にあったことが実証的に確認されることにより、<sup>8)</sup> Kaiser / Wilkins の説はその存立基盤を失い、「反学問的ナンセンス」<sup>9)</sup> とまで酷評されるに至る。だが一方、〈別の状態〉は作者によって破綻を予定づけられていると見做す後者の見解がその主な拠り所とする「楽園への旅」の章はといえば、1920 年代の草案という形でしか残されていない。いかにそれが作品の根底を成していると言われても、<sup>10)</sup> 又ムージルの意図も「現実の旅」<sup>11)</sup> へと兄妹を向かわせる方向にあったとしても、完成したテキストとして「楽園への旅」の章が存在しない以上、それが結局どのような形で作品に組み込まれるのであったのかは誰にもわからないのである。その意味で、上述の論争史を総括した D. Goltschnigg がこの最終的構想の問題について「ほとんど回答不可能」<sup>12)</sup> だと述べているのは妥当であると言える。

だが『特性のない男』における〈別の状態〉の位置づけが困難なのは、作品が未完であることにのみ因るのではない。創作の過程で残された夥しいメモの中でムージルは、あるときは「多くのことが、多くの人々がaZへと突き進む。だがうまくいかない。残るのは、認識すること、幻想を排除して敬虔であること、仕事をする事のみ」（1859）と否定的に記すかと思えば、冒頭で引用したメモのように、〈別の状態〉の問題こそは「作家ローベルト・ムージルのモーター」であると、その重要性を強調している。〈別の状態〉に対するムージル自身の態度が極めてアンビヴァレントなのである。これは何故なのか。

以下の小論における私の課題は、考察の範囲を主として第二巻、それもこの未完の小説の完成されたと見做しうる部分である「ある夏の日の息吹き」の章までに限定することによって、<sup>13)</sup>これまでともすれば観念的に、あるいは「楽園への旅」の章との関連で論じられてきた〈別の状態〉の問題を、作品内部の具体的連関ならびに時代との関わりの中で捉え直し、上に限定した作品内におけるその位置づけを確認することにある。その際私が着目したのは〈千年王国〉の表象である。『特性のない男』において〈別の状態〉には〈千年王国〉という具体像が与えられており、第二巻のウルリッヒとアガーテによる〈別の状態〉の探究は、第三部の標題に示されているように「千年王国の中へ」（Ins Tausendjährige Reich）参入しようとする試みに他ならない。この兄妹の試みに照準を合わせて〈千年王国〉の行方を追い、併せてテキストに即しつつ〈千年王国〉の深層に潜むものを解読することによって、〈別の状態〉に対するムージルのアンビヴァレントな態度が生じる理由も見出せるのではないか、と思う。

## I

『特性のない男』第二巻は帰郷の場面で始まっている（第1章）。第一巻最終章で父親の訃報を手にしたウルリッヒは、ヴィーンを立ち列車で故郷の町へと向かっていた。

その日の夕方近く・・・★に到着したウルリッヒが駅から出してみると、目の前には広く浅い広場があった。その広場は両端が街路へとつづいており、ほとんど苦痛にも似た作用を彼の記憶に及ぼしたが、それは既に何度も見はしたが再び忘れてしまった風景に固有の記憶だった。（671）

よく知られ、論じられることも多い第一巻の冒頭部に比べて古典的とも言える書出しであるが、ここには少なくとも二つの注意をひく事柄がある。一つは到着した町の名が匿名化されていることであり、もう一つはこの町がウルリッヒの「記憶」に及ばず過度に情緒的な作用である。

第一巻では都市の名は「ヴィーン」であると明示されていた。長年の不在の後に帰ってきたという条件が同じであることを考え併せれば、それに対する第二巻の匿名の町は著しい対比をなしていると言える。<sup>14)</sup> 加えて、この顕著な対比は帰郷者を迎える町の風景としても立ち現われてくる。ヴィーンの「明るい広場の浅瀬」(9)が自動車の洪水と騒音で充たされていたのに対し、今ウルリッヒを迎え入れた「浅い広場」が見せるのは「常ならぬ静けさ」である。

目に見えるものはすべて、この静けさの中でいつもより強烈であった。そして彼が広場の向こうを見やると、そこにはごくありふれた窓の棧が、夕暮れの光を浴びて、青ざめたガラスの輝きの上に黒く浮かんでいた。あたかもゴルゴタの十字架のように。( 671 )

大都市と地方都市とでは帰郷者を迎える風景にも自ずと違いはあるだろう。しかしこの静寂の空間は、その種の一般的差異に封じ込めることのできない相貌を呈して、予兆をはらみつつ、ウルリッヒを呑み込もうとしているように思える。ウルリッヒはいかなる世界に足を踏み入れたのか。参考のために『向かいのない家』と題された草案を引いてみよう。1908年というごく早い時期に書かれたものだが、そこには既に第1章の骨組みにあたるスケッチが描かれている。やはり近親者の葬儀のために帰省したのであるらしい主人公が駅前に降り立ち(ただしベルリンからの到着であり、死者が誰なのかははっきりとはわからない)、そこに広がる異様な静けさに注意をひかれ、妹リリと挨拶の言葉を交す、という簡単なスケッチではあるが、それに先立って次のような記述が見られる。「現実の世界から抜け出し、(…)とりあえずはただ別の世界の中へ、即ち象徴の世界、広くふくらんだ世界の中へと入っていく」。<sup>15)</sup> 今ウルリッヒのしている風景がこの「別の世界」への参入を暗示するものであるとすれば、しかもそれが又「象徴の世界」でもあるならば、到着した町の名が匿名化されているのもその象徴性の故にであると考えられるかもしれない。<sup>16)</sup>

しかし、では何故、匿名の町の広場に佇むウルリッヒの記憶に「ほとんど苦痛にも似た作用」が生じるのか。この過度に情緒的な反応は、幼年期をすごした町に帰ってきたときの感傷とか、Kaiser / Wilkins が言うようなかつてウルリッヒの思念の中に出現した広場（第一巻第 115 章）の「デジャ・ヴュ」<sup>17)</sup> というのでは説明しきれないと私は思う。ここで故郷の町の細部に立ち入ってみるなら、この「大きな地方都市」は何世紀も前にドイツ人市民層による入植の行なわれた「スラブの土地」であり、絶対主義体制の時代には *Statthaltereien* 即ちオーストリア帝室領の行政官庁が置かれ、それに伴って諸官庁、大学、兵営、裁判所、司教座、劇場等も整備された上、産業資本家たちの流入により重要な工業都市としても発展している——そのような、地方の中心都市として描かれている。これを読めば、ムージル研究者なら誰しも或る具体的な都市の名を脳裏に思い浮かべるに違いない。帝室領メーレンの首都であり、ムージルにとっては多感な少年時代（1891—1892 年）をすごした故郷であると共に、知識欲旺盛な文学青年として劇場がよいに明け暮れる工科大学生時代（1898—1902 年）を通して深い影響を受けた都市であるブリュンを。そして実際、ブリュンについての歴史的叙述はテキストにおける匿名の町の描写とほぼ一致するのみならず、このウルリッヒの故郷がブリュンであることは作品の中で確認されもする。第 10 章で兄妹は「スウェーデン要塞」への遠出を企てるのだが、そのスウェーデン要塞とは、三十年戦争当時スウェーデン軍のブリュン包囲に際して自然の要塞として利用されたブリュン近郊の丘の別名なのである。<sup>18)</sup>

しかし匿名の町がブリュンであることを追跡したのは、何もモデル探しをするためではない。第二巻冒頭でウルリッヒが到着した故郷の町がブリュンであり、しかもそれが匿名化されているという事実は、作品内部に埋め込まれた或る興味深い連関を浮かび上がらせてくれるからである。第一巻が〈少佐夫人の物語〉への回帰という構造を持つこと、〈少佐夫人の物語〉の深層にムージルの生涯を貫いて創作の源泉であり続けた、作家にとっての原体験とも言うべきヴァレーリエ体験があることは既に本誌前号で述べた通りであるが、<sup>19)</sup> ブリュンはそのヴァレーリエ体験の故郷であった。ブリュン工科大学の学生であった二十歳の頃、ムージルはこの地でヴァレーリエという女性を知り、彼女との恋愛体験を通して世界との合一という神秘的な存在様式を経験したのだった。この関連に加えて、第一巻最終章のウルリッヒが忘れられていた〈少佐夫人の物語〉を再び見出し、それまでの同時代批判者的あり方からの「転回」を経てヴィーンを旅立ったことを思い

起こすとき、第二巻におけるブリュンへの帰郷は〈少佐夫人の物語〉の故郷への帰還であると考えられるのである。このとき、匿名の町の広場に立ち風景を見やるウルリッヒの眼差しに、もう一つの眼差しが重ねられていると言うこともできるだろう。都市の名を隠し、それによって自らを匿名化しながら、ここでムーゼルはウルリッヒの眼を通して記憶の古層から浮上したヴァレーリエ体験の故郷を見ているのだ、と。そしてそう考えて初めて、故郷の町の広場に佇むウルリッヒの「記憶」に「ほとんど苦痛にも似た作用」が生じ、しかもその記憶が「既に何度も見はしたが再び忘れてしまった風景に固有の記憶」（傍点筆者）であると言われる理由が透視図法的に理解できるように思われる。

ただし、自らを消しつつヴァレーリエ体験の故郷を見るムーゼルは、いたずらに過去の追憶を主人公に投影しているのではない。そこには紛れもなく方法的な作家の眼も一方で働いている。というのも、過去の神秘的体験の土地を見る作家の眼差しは、主人公ウルリッヒの眼差しを貫くかたちで直接その記憶に「ほとんど苦痛にも似た作用」を及ぼすのであり、この作用はウルリッヒが「忘れてしまった」何ものかを思い出させ、その方向に彼を向かわせる役目を果たしているからである。

では、〈少佐夫人の物語〉の故郷に帰還したウルリッヒはこの地で何を思い出すのか。第1章の標題を見よう。そこには「忘れられていた妹」と記されている。ウルリッヒの妹アガーテについては第一巻第19章の父親からの手紙でその存在は知らされているものの、これまで読者にとってアガーテは存在していないに等しい。ウルリッヒにとっても事情は同様であって、彼はこれまで妹のことを一度も、父親の訃報を受け取ったときにも思い出していない。しかも二人は共にすごした幼年期以降、父親の教育方針に従って別々に育てられたため、ウルリッヒにとってアガーテは今や「忘れられていた妹」であるだけでなく「未知の妹」ですらある。にもかかわらず故郷の町に到着したウルリッヒは妹との再会に思いを巡らすのみならず、葬儀の行なわれるまでの数日が「世界で最も信頼に充ちた二人であるかのように妹とすごす、無限に続く僧房生活」となるように思うのである。この信頼の予感、そして事実、二人の同質性に支えられて裏切られない。共に「ピエロの衣装」を着て対面する有名な出会いの場面におけるウルリッヒの驚き（「そのピエロは一目見て彼自身とそっくりだった」）、それに続くアガーテの言葉（「私たちが双子だとは知らなかったわ」）は、瞬時にしての互いの同質性の発見であり、アガーテはウルリッヒによって「彼自身の夢幻的な再来であり変異である」（694）

と認識される。誰に対しても批判的な距離を保ち、従って孤独であった第一巻のウルリッヒに、こうして初めて伴侶が与えられた。アガーテとは「特性のない男」の対を成す一人の「特性のない女」<sup>20)</sup>であり、この妹との出会いによって第一巻から第二巻へのウルリッヒの「転回」は具体的な形を取り始めるのである。第二巻に入ってからウルリッヒの変化は、まずはアガーテとの果てしない対話として現われるのだが、対話の主題、そこにおけるウルリッヒの考えの方向性の中にも明瞭に見て取ることができる。

父親の葬儀を終え、世間とのつきあいから解放された兄妹は、「二人家族」と題された第8章でようやく二人だけの親密な時を持つに到る。そしてこのとき、密室を思わせる客間での兄妹の対話は「家族という概念」へと向けられるのである。人間には「私」であることと「私たち」であることという二つの存在形態がある、とウルリッヒは考える。「私」であることとは「自己の独自性という幻想」の中に住まうことであり、「私たち」であることとは「他者との結びつき」の中に生きることである。「家族という概念」には両者が混在しており、むしろ「私たち」による「私」の抑圧が見られるのではあるが、それを認めた上でウルリッヒは「家族という聖なる感情」を擁護して次のように述べる。「ぼくはしかし、その無条件の相互扶助、共同の闘争、共同の傷負いが、人類の太古の時代に根差した、いや既に獣の群れの中に刻印されていた原初の心地良さであると考えられる」と。「私」であることと「私たち」であることとを、それぞれ個幻想であり共同幻想だとして共に撃つことは可能だろう。第一巻のウルリッヒならおそらくはそうしたはずだ。しかしここでウルリッヒは「私たち」の世界、即ち近代的自我意識の外皮が溶解した彼方に開ける共同の世界を透視しようとするのであり、その失われた起源を人間の原初の状態に求めているのである。ここに私たちは既にして奏でられ始めた兄妹愛の序曲を聞くことができる。何故ならこのウルリッヒの言葉は、父亡きあと彼が妹と一つの家族を形成しているという意識に支えられたものであり、その上で口にされる「共同体への願望」とは、一個の「私」として世界を批判的に対象化する折りに抜け落ちる愛の要素を、兄妹という「二人家族」の共同性の中に再び見出そうとする願望に他ならないからである。第一巻第116章で語られた「力の樹」と「愛の樹」の比喻を借りて言えば、ここに見られるのは「力の樹」から「愛の樹」への転回であると言えよう。ウルリッヒは今、「愛の樹」の根底を成していると言われた「世界に対する幼児のような関係、つまり信頼と献身の原初の記憶」(592)をアガーテとの愛の中に甦らせよう



というのである。愛におけるこのような世界との関係は、世界との一体化もしくは世界との直接的ふれあいとも言い換えられるだろう。「家族という概念」に端を発した原初の状態をめぐる兄妹の対話は、こうして自ずと、世界との直接的なふれあいを語る神秘主義の言説へと向かうこととなる。

マルティン・ブーバー編集による『恍惚の告白集』（1909年）からの直接および間接の引用が随所に埋め込まれた「聖なる対話」の二章（第11／12章）で<sup>21)</sup>、二人は実際に神秘家の書物を手に取り、その証言を検討してみせる。神秘家たちが語っているのは「ある溢れ出る輝きについて」、「ある無限の広がり、無限の光の漲りについて」であり、あるいは又「事物の没落について」、「沈黙と化することについて」、「盲目の中で明晰に見ることについて」であるが、ウルリッヒは彼らの言葉に満足できない。何故なら神秘家たちの証言は、彼らが自らの霊的な力と神の存在を「その間から奇跡が出現する二本の門柱のように」無前提的に信じているために、「途方もない発見」であることをすぐにしてやめ、教会から出される報告にも似た「いささか単調な比喩」へと零落してしまうからである。例えばある聖者の次のような言葉。「私は我が能力のすべてを越えて闇の力へと到った。そこで私は音なしに聞き、光なしに見た。我が心には底なく、我が精神には形なく、我が本性は虚ろなるものとなった」。ここで聖者が自らの神秘的体験を語りつつ、その背後に神の存在を予定していることは容易に見て取れよう。神秘家たちが語っているのは神の存在に保証されたこの種の神秘体験であり、それが魂の神への没入体験と言われようと、あるいは神による魂の拉致体験と言われようと、結局は神という一点に収斂されて見事なステレオタイプを形成する。そのような神秘家の言葉は、世界との直接的ふれあいという神秘的現象の実在を証言しているという意味で兄妹の導きの糸となりはするが、「神あるいは魂」という超越的観念を受け入れることを拒むウルリッヒとアガーテは、神秘家とは違う道を通して聖なる次元へと到るしかない。それをウルリッヒは次のような言葉で表現する。「ぼくは聖なる生の道について学んでいる」のだが、それは「この道はもしかして自動車で行くこともできるのではないか」と問いながらなのだ、と。この一見颯爽たる聖なるドライブが、しかし「可能なことの限界への旅」であることは言うを俟たない。神秘主義の伝統と快を分かち、絶対者との合一を断念した上で為される聖なる世界への超越とは、いかにして可能となるのか。

「聖なる対話」の章を読む限りでは、それはさしあたって想起によってである。ここで兄妹は過去に自分たちが体験した〈別の状態〉について倦むことなく語り

合う。「世界の裏返し、その至福にして滑稽な折り返し」について、「外部と内部の境界が弛み、消滅してしまうという不思議な感覚」について、「容認と献身と友愛と無私から成り立つ世界」について…。そのような体験が想起され、対話の中で互いに重なり合い、一つの渦を形作っていくうちに、二人の間には次第に或る確信が生まれてくる。「ある第二の異常な状態」が存在しており、それは「人間に可能であり、かつ諸宗教よりも根源的な状態なのだ」という確信である。これは神を想定せずとも聖なる世界への超越、つまり世界との根源的ふれあいは可能だとする信念の表明であるが、「第二の状態」という言葉から、あるいは人は問うかもしれない。それは第一巻でウルリッヒの苛烈な批判が向けられた、アルンハイムとディオティーマの抱く「第二種の現実」願望と同質のものではないか、と（第69、114章）。だがそこで批判の眼目となったのは、「第二種の現実」願望の中に潜む欺瞞性の暴露であった。現実と非現実を慎重に分離した上で後者に憧れる、それによって後者への願望は前者すなわち現実を補完する安全弁として作用する——そのような二分法に基づいた精神の分業が批判の対象とされたのである。それに対し、ウルリッヒがここで言う「第二の状態」とは、現在は可能性の中に埋没してはいるが、現実の只中に、永遠の相のもとにうち立てられるべき願望像である。そこに到るのが「可能なことの限界への旅」、限りなく「不可能なこと」に近いことであっても、兄妹はその実現の可能なことを信じるのである。

対話の果てに一つのヴィジョンが生まれる。「諸宗教よりも根源的な状態」すなわち〈別の状態〉の具体像としての〈千年王国〉のヴィジョンである（第15章）。

小川のように或る目標に向かって流れていくのではなく、海のように或る状態を形作っている愛については、もう充分話し合ってきた。（…）この海は静まりかえった閑寂の地で、永久に続く結晶のように純粋な出来事によって充たされている。かつて人々はそのような生をこの地上に思い描こうとした。それがぼくら自身に模して形作られていながら、ぼくらの知っているような国ではない、千年王国なのだ。ぼくらはそのように生きよう。ぼくらは一切の我欲を捨てる。財産も、認識も、恋人も、友人も、主義も、自分自身をも蓄えない。そうするとぼくらの感覚は開かれ、人間と動物に向かって解き放たれるだろう。ぼくらがもはやぼくらのままであり続けることはできず、ただ世界全体に編み込まれてのみ生きていけるようになるほどに、開かれていくだろう。

（801 f.）

ウルリッヒの語るこの〈千年王国〉の構造をパラフレーズしてみよう。まず「小川」ではなく「海」の表象が用いられているのは、〈千年王国〉を支配する原理が方向を持った運動ではなく、静止した「状態」だからである。ムーザルにあって「状態」(Zustand)という言葉は通常、全体性を開示する静的な充溢の場を意味するが、ここでも例外ではない。反復される静止した「海」のイメージは、それが隔絶された場であることによって更に強調される(「この海は静まりかえった閑寂の地で」)。静止と隔絶の空間の内実を成すのは、純粋な生起とその永続性である(「永久に続く結晶のように純粋な出来事によって充たされている」)。それは既存の世界にはない、未来に向けて投企された王国ではあるが(「ぼくらの知っているような国ではない」)、あくまで地上的な王国である(「そのような生をこの地上に思い描こうとした」)。〈千年王国〉の中では所有欲はすべて解体され(「財産も、認識も、恋人も、友人も、主義も、自分自身をも蓄えない」)、その結果、自己と世界を隔てる境界が消滅し(「ぼくらの感覚は開かれ、人間と動物に向かって解き放たれる」)、ついには世界との合一が果たされる(「ただ世界全体に編み込まれてのみ生きていける」)。

千年王国とは、言うまでもなくキリスト再臨の後、最後の審判までの一千年間イエスと殉教者たちによって統治されるという「ヨハネの黙示録」第20章に語られた地上の王国の名称である。当初文字通りに解されていたこの黙示録の預言は、キリスト教会の制度化と共に、地上に現出する共同体という本来の意味を次第に喪失し、信者の心の中に生じる現象であるとする内面化の方向へ読み換えられていくが、五世紀の初頭、千年王国は教会の中で既にそして完全に実現されているとする聖アウグスティヌスの解釈が正統的教理となっても、千年王国を地上に招来せんとする考えは、貧民層の宗教的異議申し立ての伝統と結びついた革命的千年王国運動の中に、あるいは失われた樂園を回復するための「アダム崇拜」を行なった自由心霊派の神秘主義的異端の中に生き続けていた。<sup>22)</sup> これら千年王国説に基づく中世ヨーロッパの異端的宗派および救世運動は、ノーマン・コーンによれば、「共同体的」、「現世的」、「緊迫的」、「絶対的」、「奇跡的」であることを公分母とする救世観を持っていたという。<sup>23)</sup> 今ウルリッヒによって呈示された〈千年王国〉は、無論そういった宗教的社会運動との直接的関係は持たないにしても、上に分析したその基本的構造に見られる絶対的でありながら地上的な共同体の性格は、この歴史的背景と呼応していると言えよう。

さて、この〈千年王国〉こそは兄妹の愛の行手に到達目標として大きく掲げら

れたユートピア像であるが、それは突然ここで生まれたのではない。それが「聖なる対話」の果てに出現したヴィジョンであること、「聖なる対話」とは過去における〈別の状態〉の体験を想起する場であることは既に述べたが、〈千年王国〉の中核を成す静止した海の表象に注目するなら、これと同様のイメージが第一巻のウルリッヒによって語られていたことが思い起こされる。第一巻第113章、ハンス・ゼップとゲルダ・フィッセルとの会話の中でウルリッヒは、「人間の感じる最高の昂揚」について「それは本来、水たまりのように、何も変化することのない静止した状態である」と語っていた。そして、この発言を導く会話の発端に位置していたのは、あの〈少佐夫人の物語〉なのである。

言えば、『特性のない男』第一巻の読者なら、直ちに〈千年王国〉とく少佐夫人の物語〉の相似関係に気づくだろう。先ほど〈千年王国〉の構造をパラフレーズした際の基本的構成要素を要約して、海の表象・静止・隔絶・純粋・永遠・地上性・非所有・境界の消滅・世界との合一として捉え直すとき、〈少佐夫人の物語〉におけるウルリッヒの神秘の体験は、この要素をことごとく兼ね備えているのである（第一巻第32章）。<sup>24)</sup> まずそれは周囲を海に囲まれ、外部世界から閉ざされた孤島での体験であった（海の表象、隔絶）。風景の中へ沈み込んだウルリッヒが遭遇するのは「世界が彼の目を踏み越えていく」という経験である（境界の消滅）。「世界の心臓部」に到達したウルリッヒ（世界との合一）に開示されるのは、「内部感情が空間もなく存在を結びつけ」という明晰な状態であり（純粋）、無限の円環を描く「噴水」に象徴される持続的生起の現象である（永続）。それは又「比較しようもない穏やかさ、柔かさ、静けさ」の体験でありながら（静止）、紛れもなく現実に生じたものだった（地上性）。更に、ウルリッヒはこの島から少佐夫人に宛てて一通の手紙を書くのだが、そこに記されたのは愛における「所有と我がものであれという願望」の拒否なのである（非所有）。

このような両者の緊密な対応関係は、だが果たして単なる相似と言って済ませられるだろうか。これまでの見解を振り返るならば、〈少佐夫人の物語〉は〈別の状態〉——〈千年王国〉はその具体像である——のせいぜい「前形態」<sup>25)</sup>もしくは「最初の体験」<sup>26)</sup>と見做されることが多い。確かに〈千年王国〉について後に再び考察を加えたウルリッヒは、その予兆の中での存在を確信し「それは『少佐夫人の物語』として始まったことだった」（874）と思う。その意味で〈少佐夫人の物語〉が〈別の状態〉の「最初の体験」であり「前形態」であるというのは間違いではない。しかし遺稿部の或る草稿の中では、次のような兄妹の対話が

記されてもいる。いつまでも行動に移らず、行動の可能性を慎重に分析するだけの兄に苛立ち、何故まず手を差し伸べないのか、とアガーテが言う。ウルリッヒはそれに「きみは『少佐夫人の物語』を覚えているか」、「あの物語のように終わらせてはならないのだ」(1274)と答えるのである。ここには、〈千年王国〉に到ろうとする兄妹の、少なくともウルリッヒにとってのユートピアの原像がくっきりとあぶり出されている。〈千年王国〉とは、かつての孤島での体験を基にして作り出された理想型であり、「千年王国の中へ」入ろうとする第二巻における兄妹の試みは、未来のユートピアを志向するかに見えながら、実はかつて「突然の断絶」(126)と共に失われた〈少佐夫人の物語〉を復原しようとする試みに他ならないのである。

精神医学者中井久夫はその著『分裂病と人類』の中で、ルネサンス宮廷におけるユートピア類型に触れて、「ユートピアは古代から近代に至るまで一貫して非常に典型的なものであり、未来を望むものではなく、むしろ古代世界都市への復帰幻想である」と述べている。<sup>27)</sup> この断定の正否を問う準備は今の私にはないが、少なくとも或る新しいものの造形に際しては、既に存在しているものが規範あるいは源泉として何らかの形で関与していると言うことはできるだろう。『特性のない男』における〈千年王国〉への試みもまた、そのような〈少佐夫人の物語〉への復帰幻想の側面を色濃く持っているのであるが、ここで思い出されるのは、かつてムージルの抱いたヴァレーリエ体験への復帰願望である。1905年に始まるヴァレーリエ体験への復帰願望については、本誌前号で日記および種々の創作のための草案をもとに跡づけたが、そのヴァレーリエ体験についてムージルは、1901年のヴァレーリエ宛ての手紙の草稿で次のように語っていた。「僕は野蛮人たちの中を敬虔に歩き回る。敬虔に、—— というのも僕の魂は充ち溢れているのだから——そしてそれを僕は敬虔という。——敬虔に…それは地上の彼方にある国ではない——が、この地上の彼方に<sup>28)</sup>」。この宗教的体験が〈少佐夫人の物語〉の深層に潜んでおり、更にその〈少佐夫人の物語〉が〈千年王国〉の原像となっていることを再度確認するなら、ここで言われる「地上の彼方にある国ではない——が、この地上の彼方に」ある国(das Reich nicht jenseits der Erde — aber jenseits dieser Erde)は、神秘的かつ地上的な〈千年王国〉(das Tausendjährige Reich)の祖型であると考えていいだろう。本章のはじめに私は、第二巻におけるウルリッヒの帰郷は〈少佐夫人の物語〉の故郷への帰還であり、その冒頭の場面にはヴァレーリエ体験を透視するムージルの眼差しが読み取れると述べたが、若き日のこの神秘的体験がこうして〈少佐夫人の物語〉を貫いて〈千年王国〉の

基層にまでその影響を及ぼしているのを見ると、第二巻でのウルリッヒの帰郷は〈少佐夫人の物語〉の復原としての〈千年王国〉への旅をアガーテと共に往なわせるためのものであり、そこにはかつてムージルの抱いたヴァレリーエ体験への復帰願望がテキストの深層で介在していると考えられるのである。

ではいかにしてムージルは、兄妹を〈千年王国〉に到らせようとするのか。想起の力は過去に存在したユートピアの姿を浮かび上がらせ、方向づけを与えてはくれる。しかし既に見たように、それが神を排除した聖なる世界への超越である限り、超越への最後の飛躍を可能にする仕掛けが必要なのはである。

U. Karthaus はこの問いを前にして不可能を宣告する。何故なら、超越とは信仰という媒介があって初めて可能なものであり、ウルリッヒの主張する自動車による「聖なる道」の走行は、その「ガソリン」<sup>29)</sup>をどこからも補給できないからである。だが果たしてそうだろうか。Karthausのように「ウルリッヒの神学」<sup>30)</sup>にのみ照準を合わせ、ウルリッヒと神秘家の存立基盤を比較考察すれば、あるいは不可能という結論が導き出せるかもしれない。しかしここでKarthausが見落しているのは、〈千年王国〉への旅はウルリッヒ一人が行なうのではなくアガーテと共に為されるということ、換言すれば〈千年王国〉は二人の兄妹愛の到達目標として設定されているという事実である。〈千年王国〉という言葉自体が本来的に「共同体的」(ノーマン・コーン)あり方を志向するだけでなく、「アガーテとウルリッヒの関係の進展はほとんどaZの説明に等しい」(1831)と遺稿部の或る創作メモでムージルも言うように、〈別の状態〉の探究と兄妹愛の実現への過程は不可分の関係にあるのだ。視点を換えるなら、Karthausの言う不可能を可能に転じさせるためにこそアガーテが呼び出されたのだと言えるだろう。〈千年王国〉とは、兄妹愛の成就という神話の根源像のもとに顕現するユートピアなのである。

## II

ユートピアについての百科全書とも言うべき大著『希望の原理』の中で、エルンスト・ブロッホは「婚姻の二つの神話的ユートピア」像を提出している。一つは「キリストの聖体」(Corpus Christi)の模像としての超地上的ユートピアであり、他の一つは「高貴な一対」(Hohes Paar)というカテゴリーに見られる貴族的かつ異教的な地上的ユートピアである。「キリストの聖体」の模像としての婚姻とは、周知の如く教会によって制度化された結婚の秘蹟を意味するが、そのキ

リスト教会から認められなかったにもかかわらず、古代から一貫して婚姻の最も本来的な願望像であり続けたのがプロッホの言う「高貴な一対」であった。「高貴な一対」とは「根源的に男性的なもの」と「根源的に女性的なもの」との結合の象徴であり、この象徴は例えばソロモンとシバの女王、アントニウスとクレオパトラといった地上における理想的男女の結合像の中に読み取られたが、その際男性像の背後には太陽の神、女性像の背後には月もしくは地球の女神の存在が想定されていた。この男女の神々が結びつくことによって世界に祝福が与えられるという「古い星辰神話の背景」から生み出された「高貴な一対」のカテゴリーは、後代に到っても婚姻の願望像の中に継承され、この神話的な力を背景とする二人の人間の性的な合一によって、「高貴な一対」は現実の天空には同時に現われえぬ月と太陽を、同時にしかも並置して出現させる力すら持つと考えられたのである。<sup>31)</sup> このような神話的合一像の光輪が『特性のない男』のウルリッヒとアガーテをも取り巻いている。「きみは月だ―」(1084)というウルリッヒの言葉はアガーテの背後に月の女神イシスを浮かび上がらせ、<sup>32)</sup>「非凡なこと、別のことを体験するために選ばれている」(728)という意識を持つアガーテに「双子」であると認知されたウルリッヒは、このとき既にオシリスである。イシスとオシリスを演じる兄妹愛―それは月と太陽を同時に出現させるための、不可能を可能にするために賦与された神話的意匠なのである。

この神話的合一像は時を置いた兄妹の対話の中でより明確な形を与えられる。〈千年王国〉の黙約を交した後、一人ヴィーンに帰ったウルリッヒを追ってアガーテがやって来る。その再会の日の夜、アガーテはプラトンの両性具有神話へと兄を誘うのである(第25章)。神々の怒りをかい、二つに分断された「月の子孫」<sup>88)</sup>が互いの半身を求めて地上をさまよい続ける――プラトンの『饗宴』においてアリストパネスによって語られるこの神話を持ち出し、兄妹という存在はその合体への道のりを既に半ば進んでしまっているとアガーテが言うとき、その意図は明らかであろう。ためらいつつも同意したウルリッヒは次のように言う。

二つに分かれた人間の神話と共に、ぼくらはピュグマリオンや、ヘルマフロディートスや、イシスとオシリスのことを思い出すこともできる。それは形こそ違うが皆おなじものなのだ。このような異性のドッペルゲンガー願望は太古から存在する。(…)肉体世界の制約とは無縁に、二つの同じでありながら異なる姿として出会う愛の流動体に関する夢は、孤独な錬金術の中で、繰り返し

何度も人間の頭脳のレトリックから立ちのぼったのだった——。( 905 )

ここでウルリッヒは兄妹愛の向かうべき方向をプラトンの神話に限定せず、より広い両性具有神話との関連の中で位置づけようとしているが、その際持ち出される「鍊金術」という言葉に着目した W. Fuld は、『特性のない男』における兄妹愛の両性具有志向の源泉はプラトンではなく、ロマン派の哲学者フランツ・フォン・バーダーであると主張している。この小説の兄妹愛のあり方にとって重要な問題を含んでいるので、その概要を紹介しておきたい。

原人間アダムは両性具有であるという、カバラの創世記解釈にまで遡りうる考えを鍊金術から継承し、アダムの墮罪についての思索を深めたのはヤーコプ・ベームであった。神の似姿を持ち、完全な調和のうちに生きていたアダムの墮罪とは、ベームによれば「鏡の中に自己を認め、自己を知ること」に始まる。それによって自己の存在に目覚めたアダムは、神との一致を失い、自らの肉体とエヴァを得た代わりに両性具有者であることから追放されたのである。<sup>34)</sup> このベームの考えがバーダーに受け継がれ、彼のもとで両性具有の回復が人間に課せられた使命として位置づけられる。バーダーの考えでは、それは愛によって可能なのである。現実の異性愛はアダムの墮罪の結果もたらされた疎隔状態であるから、地上の恋人たちは愛の諸段階の中で必然的に訪れる不和を第二の墮罪となし、それを克服することによって高次の存在へと自らを越えていかなければならない。この第二の墮罪を経て新たな存在となったとき、愛は真実となり両性具有が回復される——そう考えるバーダーは芸術家の使命はとりわけ重要であると言う。何故なら、「この再生の過程もしくは愛の宗教」をあますところなく描くことが芸術家の使命であり、それによって芸術家は「樂園を再び獲得することは可能であるという希望を我々の内に甦らせること」ができるからである。そして Fuld は、ムージルが日記でバーダーに言及している事実から、<sup>35)</sup> このようなバーダーの考えをムージルは知っており、『特性のない男』における〈別の状態〉の叙述はバーダーの要請に対するムージル流の返答だと考える。<sup>36)</sup> 勿論、神との直接的関係を欠いたムージルにバーダーの説く樂園への回帰がそのまま受け入れられるはずもないのではあるが、始原における神との合一を兄妹の神秘的合一へと切り換えることによって、両性具有の回復という基本的方向性は保たれる。かくしてウルリッヒとアガーテの兄妹愛は、第二の墮罪の「帰結は聖書の根源像の場合とは異なるものとなるだろうという希望」に向けて歩まれる、両性具有回復の試みと見做



されるのである。<sup>37)</sup>

このような Fuld の考えは、プラトンの神話にのみ還元されがちであった『特性のない男』における両性具有の問題を、より広い精神的連関の中で捉え直した点で重要であり、また中世における千年王国運動の一端を担った自由心靈派の、「墮罪以前に存在していた無垢の状態」に戻ることを主張するアダム崇拜と照らし合わせても興味深いものがあるが、<sup>38)</sup>それはともかくここで確認しておかねばならないのは、バーダーの考える両性具有とは、天上のソフィアと結びついた神性のアンドロギュノスだという事実である。この点に Fuld は触れていないが、バーダーにとってのアンドロギュノスは男女の単なる癒着像であるヘルマフロディートスとは峻別されるべきより高次の概念であり、どこまでも地上的存在ではないヘルマフロディートスはアンドロギュノスの「カリカチュア」<sup>39)</sup>にすぎない。ところがムーゼルの場合、「ピエロの衣装」を着たアガーテにウルリッヒが「ヘルマフロディートス的なもの」を感じ取る出会いの場面（第2章）以来、両性具有に関しては作品の中で一貫して「ヘルマフロディートス」という言葉を使っている。それが恣意的な言葉の選択によるのではなく、兄妹愛における両性具有願望の基本的な形に基づいた語の使用であることは、先の引用に続く兄妹の対話がその最後に提出する両性具有の具体像において明白に示されている。というのも、プラトンの神話に端を発し、二人が兄妹であり双子であることを確認し合うウルリッヒとアガーテが到り着くのは、自分たちが「シャム双生児」に他ならないという認識だからである。生物学的な事実としては双子ですらない兄妹がここで呼び出した「シャム双生児」という奇態な願望像が、その二体の癒着合体した姿からして、ヘルマフロディートスの一種であることは即座に見て取れよう。そして Fuld の言うように、ムーゼルが始原におけるアダムの両性具有およびその墮罪という考えをバーダーから汲んでいるなら、それを踏まえて呈示される「シャム双生児」の概念は、バーダーの説く神性のアンドロギュノスの回復に抗して、あくまでヘルマフロディートス的、地上的な存在に踏みとどまろうとする兄妹愛の性質と分かち難く結びついているように思われる。とすれば、ここでムーゼルがバーダーの伝える神秘的両性具有神話の枠組みを借りて行っているのは、この神話の巧妙な書き換えだと考えられるのである。

では何故ムーゼルは、そのような書き換えを行なう必要があったのだろうか。この問いはシャム双生児としてのウルリッヒとアガーテがこの地上で回復すべきものは何なのかという問題と密接に関係してくるが、この問題についてテキストで

は次のように述べられている（第22章）。〈千年王国〉の予感、

それは「少佐夫人の物語」として始まったことだった。その後の経験は重要なものではなく、いつも同じことの繰り返しにすぎなかった。手短かに言えば、ウルリッヒが「墮罪」と「原罪」の存在を信じているということと大差はなかったのである。即ち、かつて人間の行為の中に、ほぼ恋する男が醒めるのにも似た根源的な変化が起こったのだと仮定すればよかったであろう。（…）もしかすると、精神のこの変化をひき起こし、人類を原初の状態から追放したのは、本当に「認識」のりんごだったのかもしれない。そして人類は、数えきれないほどの経験を経て、罪によって賢くなった後で、再び原初の状態への帰路を見出すのかもしれない。（874）

ここでウルリッヒは個人的な体験としての「少佐夫人の物語」と「墮罪」以前のアダムの楽園を二重写しに見ている。「少佐夫人の物語」からの離脱が彼にとっての「墮罪」であるとき、「少佐夫人の物語」の神秘の体験は人類の回帰すべき楽園としての「原初の状態」と重なり合う。ウルリッヒとアガーテが回復を試みるのは、そのような人類の始原の楽園に重ね合わされた「少佐夫人の物語」なのである。

ただし、この重ね合わせはあくまでも「手短かに言えば」という留保のもとで、言い換えれば比喩として語られているのであって、両者が完全に同一視されているわけではない。そもそも〈千年王国〉のヴィジョン自体が、その名称にもかかわらずキリスト教的伝統とは一線を画した「諸宗教よりも根源的な状態」のユートピアとして生み出されたものであり、〈千年王国〉に到ろうとする兄妹の試みは神＝絶対者という観念の排除を前提としていたことを思い起こせば、ここで言われる「原初の状態」は直接アダムの楽園を指し示すのではなく、より広汎な神話的始原世界を意味していると考えられる。ウルリッヒとアガーテの目指す〈千年王国〉がこのような神話的始原世界への回帰という方向性を持ち、しかもそこには同時にあくまで地上的なく少佐夫人の物語〉が回復されるべき根源体験として重ねられているとき、兄妹の志向する両性具有は、バーダーの説く神性のアンドロギュノスではなく、やはりどうしてもヘルマフロディトスの形を取らねばならなかったのではないだろうか。「シャム双生児」なる二人の自己規定は、〈少佐夫人の物語〉という個人的根源像を始原世界への回帰という両性具有

神話に接続するための仕掛けであり、この仕掛けによって初めて、兄妹の〈千年王国〉への旅は可能となるのである。

だが、それがいかに個人的復帰願望に支えられているにせよ、神話世界への回帰という方向性を持つ以上、この旅は同時代の非合理主義的思潮に通じる回路を内包してはいないだろうか。G. Müller が指摘するように、神話への回帰、それによって得られるユートピアは「世紀転換期の表徴」であり、以来この表徴は様々な思想上の差異を併せ持ちながらもC. G. ユング、ルドルフ・シュタイナー、オスヴァルト・シュペングラーらの考えに刻印されていたし、<sup>40)</sup> その世紀転換期にルートヴィヒ・クラゲス、アルフレート・シューラー、カール・ヴォルフスケールらミュンヘン宇宙論サークルによって再発見されたバッハオーフェンの神話学は、1920年代に到って「母権制ルネサンス」と呼ばれるほどの広汎な影響をドイツ語文化圏に与えていた。<sup>41)</sup> 勿論このバッハオーフェンの母権論は、エンゲルスをはじめとするマルクス主義者たちによって評価されたことからわかるように、<sup>42)</sup> それ自身非合理主義というわけではない。だが再発見以後のバッハオーフェンをその受容史の面から見るなら、母権制を二十世紀の技術文明に対置し、反理性、反進歩等のスローガンと共に神話の古層への回帰を説く宇宙論サークルの「反エホバ主義」<sup>43)</sup> は、明らかに非合理主義の思潮の中に位置づけられるものである。自らもバッハオーフェンに深い関心を寄せていたベンヤミンは、1934年から35年にかけて書かれたエッセイ「ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフェン」の中で次のように述べている。「エンゲルスが既に予感していたバッハオーフェン理論の神秘主義的帰結は、ここ数年のうちにその頂点に達した。この理論の最近の受容史には、今日ドイツ・ファシズムの理論の一部を形成しているあの秘教の中枢部が含まれている、と言っても過言ではあるまい」。<sup>44)</sup>

『特性のない男』第二巻は1932年、このような時代のコンテクストの中で発表された。このとき主人公の兄妹によって歩まれる〈千年王国〉への道は、神話世界への回帰という同時代の思想潮流に棹さすものと受け取られる可能性を初めから持っていたであろう。そして事実、第二巻発表後もっとも早い時期にその書評を書いた一人であるB. Guilleminの伝えるところによれば、ルポルタージュ作家エゴン・エルヴィン・キッシュはGuilleminが1932年12月20日付の『ベルリーナー・ターゲブラット』紙上で『特性のない男』第二巻に肯定的な発言をしたことを非難して、この小説を「極めて反革命的」とののしったという。<sup>45)</sup> キッシュのこの言葉が1933年の「ヒトラーの権力掌握の直前」に吐かれたことに留意すると

き、小説の第三部が「千年王国の中へ」という標題を掲げたことの持つ同時代にとっての意味も併せて考えねばならないだろう。ナチスの掲げた「第三帝国」(das Dritte Reich)なる標語は、周知のように1923年、自らの著書の標題にこの言葉を用いたアルトゥール・メラ＝ヴァン＝デン＝ブルックをその直接の生みの親としているが、この言葉は政治史的には神聖ローマ帝国とホーエンツォレルン家の第二帝国に続く第三の帝国を意味するものの、その背後にはフロリスのヨアキム(1145～1202年)が説いた歴史の三段階説の影響の跡が見られる。ヨアキムによれば、歴史は三つの連続する時代の上昇過程として捉えることができる。第一の時代は「父」すなわち律法の時代であり、第二の時代は「子」すなわち福音の時代である。第三の時代は「聖霊」の時代と呼ばれるが、これは第一の時代が恐怖と隷属の時代、第二の時代が信仰と服従の時代であるのに対し、愛と歓喜と自由の時代であり、この第三の時代に到って初めて神の知は直接すべての者の心に開示され、以後最後の審判の日まで人々は神秘的忘我のうちに神を讃える歌をうたうとされる。<sup>46)</sup> このヨアキムの説が「新しいタイプの千年王国説」であることは容易に見て取れるが、「第三帝国」という言葉はこの「第三の最も栄光に充ちた治世という幻想」を受け継ぎ、<sup>47)</sup>あるいはむしろ利用するのである。このときナチスの唱える「第三帝国」は即ち、エルンスト・ブロッホが1937年『インターナツィオナーレ・リテラトゥーア』誌に発表した論文「第三帝国の原史に寄せて」において的確に指摘したように、歪曲された「新しい千年王国」<sup>48)</sup>の約束なのであり、そのような千年王国の幻想をふりまくナチスが最終的勝利を収めつつある政治状況の中で、「千年王国の中へ」という標題かつ主題を掲げた小説が現われたなら、それが国家社会主義のイデオロギーへの加担の書であると見做される条件は十二分にそろっていたと言えよう。キッシュの「反革命的」という言葉はこのような時代の文脈の中で発せられたと考えられる。

ところがその数年前、当時まだムーゼルをほとんど知らなかった Guillemin に『特性のない男』という作品を執筆中の作家を教え、その際ムーゼルを「現存する最大のドイツ詩人」と称讃したのも同じキッシュなのである。<sup>49)</sup> そのことを Guillemin に指摘されたキッシュは当惑して沈黙したとのことであるが、ここに私たちは『特性のない男』の第一巻と第二巻の間にある落差に戸惑う同時代の読者を、その典型的な姿で見ることができる。しかし又、この戸惑いは現代の読者である私たちをも捉える。というのも第一巻におけるウルリッヒは、「神話、単純への回帰、魂の国」について語るアルンハイム(第106章)、魂の欠如態として

の「文明」を嫌悪するディオティーマ（第24章）、資本主義の時代の「機械的思考様式」を拒否し「すべてを抱擁する愛と共同体」を志向するハンス・ゼップ（102章）等、「平行運動」の内外で反物質文明、反理性、反進歩を標榜する非合理主義者たちの言動を、「粗野な形而上学的欲求」に基づく「神秘主義的な考え」であるとして（第113章）、繰り返し批判しており、この批判は又、これらの人物の造形に際してムージルのとった「モンタージュ技法」、即ち個々の非合理主義的人物の言説を例えばヴァルター・ラーテナウ、モリス・メーテルランク、オスヴァルト・シュペングラーら、同時代もしくは同時代に尚も影響を与えている思想家の著作から再構成する手法からみて、ムージル自身の同時代批判だと考えられるからである。<sup>50)</sup>ところが第二巻のウルリッヒは、前章で見たようにアガーテとの再会を経てその思考の方向を人間の原初の状態へと向け、神秘主義に接近する（第1－12章）。「聖なる対話」の果てに生まれた〈千年王国〉のヴィジョンは、本章で既に見た通り、兄妹二人から成る神話的な愛の共同体であり、この〈千年王国〉へ参入しようという黙約を交した後ひとりヴィーンに帰ったウルリッヒは、留守の間に「行動のスローガン」（*Parole der Tat*）を打ち出していた平行運動に背を向け、これから始まるアガーテとの共同生活によって「彼の『休暇生活』の試みは終わりを告げるに違いない」と思う（第13－15章）。そして第24章以降、実際にアガーテがヴィーンにやって来てからの二人は「時間のかかる社交上の義務」（929）、即ち平行運動との関わりを余儀なくされながらも、その対話の中心にあるのは常に〈千年王国〉であり、ウルリッヒは平行運動の「大夜会」（994）に臨んでも、もはや積極的に論客たちとの議論に加わろうとはしない。たとえ誰かと話をしていても、「彼はアガーテとの対話を続けていた」（1038）のである。

こうしてウルリッヒは一切の政治的事柄から退却し、第38章に到って最終的に平行運動からの離脱を宣言するのだが、第一巻から第二巻にかけてのウルリッヒのこのような変化、それに伴う『特性のない男』の表面上の脱政治化、〈千年王国〉に収斂されていく神話化への道は、第一巻に拍手を送った読者の眼にムージルの裏切り、思想上の転向と映ったとしても不思議ではない。しかし第一巻と第二巻公刊の時間的隔たりはわずか二年である。1930年から32年にかけてのドイツ・オーストリアの精神状況がかつてない変動を経験していたにせよ、第一巻で見せたムージルの強靱な批判精神がこの間に変節したとは、彼の個人的精神状況と照らし合わせても考え難い。先に述べたキッシュの「極めて反革命的」という第二巻

に対する非難を Guillemin から伝え聞いたムーゼルは、日記に次のように記している。「キッシュが私の本について反革命的だと言ったという。私は既にそのように思われていたのだ。こうお答えしよう。猿は、利用できるかどうかを試すために何でも口に入れたがる。もう一つの利用法があることを奴は知らないのだ」。<sup>51)</sup> 反革命的な小説と見做されていることを知った上で言われる第二巻の「もう一つの利用法」(eine andere Verwendbarkeit) とは何を意味するのだろうか。

この問いに答える前に一つだけ確認しておかねばならないことがある。それは、1932年に出版された『特性のない男』第二巻はムーゼルが本来望んだ形で世に出たのではなく、経済上の理由ならびに第二巻の刊行を急ぐローヴォルト社との折り合いをつけるために二分冊とされたうちの第一分冊として出されたという事情である。従ってこの第二巻には第38章までしか収められておらず、〈千年王国〉へと歩む兄妹の試みがどのような経緯を辿るのかも明らかではない。それを知るためには第二分冊の刊行を待たねばならなかったが、予定された第二分冊は結局完成されないまま作者の死を迎えることになる。しかし私たちのもとには「ある夏の日の息吹き」と題されたR.52章までの諸章が遺稿部として、第一分冊の後を継ぐ形で残されている。『特性のない男』第二巻は果たして「反革命的」な小説だったのかどうか、次章ではこの問題を遺稿部に即して検討したい。

### Ⅲ

〈千年王国〉のヴィジョンを目標として前方に大きく掲げたウルリッヒとアガーテが合一の時に向けて歩み出すのは、「一連の不思議な体験のはじまり」と題された章に入ってからのものである(Dr. 45章)。兄妹が夜会に出かけるための着更えをしている場面、絹の靴下をはこうとして身を屈めたアガーテのうなじに「三本の矢」のような筋が刻まれる。このアガーテの姿は「瞬間的に拡がった静けさから生まれた絵」としてウルリッヒの身体に突きささり、彼を思いもかけぬ行動に駆り立てるのである。アガーテの背後に忍び寄ったウルリッヒは、突然その首筋に刻まれた三本の矢の一つを咬むのだ。更に、彼の

右手は妹の膝を抱えていた。そして左の腕でその身体を抱き寄せながら、彼は脚の腱にはずみをつけて、妹と共に飛び上がった。(1082)

この「すべての筋肉を動かせる、無邪気な、初めはいささか粗野ですらあった戯れ」としてのジャンプは、しかし同時に二人の「四肢を限りなくやさしく麻痺させ」、待ち望んでいた合一へと兄妹を導く。出会いの日々の中で口にされた「共同体への願望」（第8章）は、こうして「一枚の絵にこめられた驚くべき情熱」の行為によって叶えられ、二人は今「共同の状態」の只中へと入り込んだのである。それは初め「不可能なこと」と呼ばれていた。不可能を可能にしたこの出来事が前章で述べた神話的背景からその力を汲んでいることは、「きみは月まで飛んでいき、そこから又ぼくのもとに贈られてきたのだ—」というこのときのウルリッヒの言葉に端的に示されている。すべては「月夜の出来事」として起こったのだった。プラトンの両性具有者は「月の子孫」であり、月はイシスのシンボルでもある。<sup>52)</sup>

この「月夜の出来事」は翌日、白日の庭へと移される(Dr. 46章「白昼の月光」)。H. Brosthaus も言うように、ここでムーヅルは移ろい易い月夜の現実を明るい太陽の光のもとに引き出し、成立したばかりの「まだ影のような合一」（1083）が神話的月光の磁場を排除してもなお成立可能かどうか、検討に付すのである。<sup>53)</sup>そしてこの日、ウルリッヒとアガーテがいつものように寝椅子を庭に持ち出したとき、夏の草木に囲まれた花ざかりの庭は「魔法にかけられた庭」として立ち現われる。樹々や小道など現実の事物はもとのままでありながら、庭のすべては兄妹を結ぶ「線」を「軸」として目に見えぬ変容をとげているのである。変容しているのは空間だけではない。時間も又「死と隣り合わせの不気味な関係」を保ちつつ、あるいは静止するかに見えながら流れていく。このような「空間・時間感覚」の変容が〈別の状態〉の根本体験であるなら、<sup>54)</sup>ここで既に兄妹は〈千年王国〉の圏内に一歩足を踏み入れていると言える。この変容の過程が完成し、今はまだ途切れながらもかすかに流れている時間が停止するとき、〈別の状態〉の持続態としての〈千年王国〉が出現するのである。<sup>55)</sup>

そしてそれは、『特性のない男』の中で完成されたテキストとして私たちが読みうる最後の章である「ある夏の日の息吹き」の章において実現する(R. 52章)。その冒頭部を長さを厭わず引用してみたい。

太陽はその間に高く昇っていた。浜辺に打ち上げられたボートのように、寝椅子を家のわきの陰地に置き去りにして、二人は夏の日の底に広がる庭の芝生に横たわっていた。そうやって彼らは、もうかなりの時をすごしていた。周囲の

ものは移り変わっていたにもかかわらず、それが変化として意識されることはなかった。だがそれは会話が停止しているためでもなかった。二人の会話は途切れを感じさせることなく、その場にとどまっていたのだった。

色あせた花吹雪が、花時をすぎた樹々を離れ、音のない流れとなって光の中を漂っていた。花びらを運ぶ息吹きは柔かく、木の葉ひとつ揺れなかった。芝生の緑の上に樹の影は落ちていなかったが、その緑はまるで眼のように、内側から濃くなっているように見えた。やさしくあふれるほどの初夏の葉に覆われた樹々や灌木は、あるいはかたわらに佇み、あるいは背景に退いていたが、それはさながら、祭りの衣装に身をつつみ、驚嘆しつつ魅了されて、この葬列、この自然の祝祭を呆然と眺めている観客のようであった。春と秋、自然の言葉と自然の沈黙、あるいはまた生の魅惑と死の魅惑が、この絵の中で溶け合わされていた。心臓は止まり、胸からえぐり取られ、空中を進み行く沈黙の葬列に加わるかのように思われた。(1232)

花吹雪の葬列が音もなく進む行くこの庭で、すべてのものが隅々まであまねく清澄な光に充たされていることがわかる。季節の差異、生と死の境界はもはや存在しておらず、深い沈黙はそれ自身、純粋な生起を開示する「自然の言葉」となる。静かな恍惚感が兄妹を包み込み、世界との融和感情にひたらせるのだが、既にして彼らと世界を隔てる障壁が失われているのであれば、彼らが世界の中へと溶け出しているとも言えるだろう。海の表象・静止・隔絶・純粋等、前々章で〈千年王国〉の構造を分析した際の指標を用いて分節化するまでもない。「時間は静止し、一千年はまばたきのように軽くなった」と言われるこの庭に、〈千年王国〉は顕現したのである。

それが聖なる世界であることは、先の引用に続いて再び神秘家の言葉がアガーテの記憶に甦ってくることで示されている。「私は我が能力のすべてを越えて闇の力へと到った／私は愛している。だが誰をかは知らない／」—このような神秘家の声がアガーテの内で反響する。かつて、神の存在を無前提的に信じるあまり「いささか単調な比喩」に墮していると言われた神秘家の証言がここで引き合いに出されるのは、しかしその事実を再確認するためではあるまい。そうではなく、神秘家とは違う道を通して同質の世界に到達したことの、歓びの表明であるように思われる。神との一致ではなく、兄妹愛の成就による聖なる世界への超越が二人の企てた「可能なことの限界への旅」であったとすれば、「白日の神秘主



義」(1089)を為し遂げた今、その旅は終わりを告げるはずなのだから。そして事実、〈千年王国〉は二人の目の前で永遠の相のもとに佇んでいるのである。

そのはずであった。ところが小説は、その予想された終結点に到って意外な展開を見せるのである。アガーテは〈千年王国〉での身の処し方を思い出し、無我、非所有という要請に従おうとする。

だがまもなく、思考や、感覚および意志の通告を完全に遮断するのは、子どもの頃、懺悔と聖体拝領の間に罪を犯してはならぬと言われたのと同様、不可能な課題だとわかった。それで彼女はいくらか努めてみた後で、この試みを完全に放棄したのである。(1234)

辿り着いたばかりの〈千年王国〉がこのような形で否定されるのは奇妙なことではないだろうか。何故ならここでアガーテが「不可能な課題」だと言っているのは、〈千年王国〉のヴィジョンに予め含まれていた約束だからである。〈別の状態〉の破綻の問題に関して研究者の多くは、それが持続困難であることを理由として挙げている。確かにムージル自身日記の中で、〈別の状態〉は「あまりにもすばやく逃れ去ってしまう」<sup>56)</sup>と言っており、ある創作メモの中でも「aZは実生活のための処方とはならない」(1478)とウルリッヒに言わせている。しかし私がここで問いたいのは、現実レベルにおける〈別の状態〉の持続可能性のいかんではなく、作品内においてその持続が拒まれる理由である。というのもテキストの上では、〈千年王国〉はあくまで永遠のものとして構想されており、既に見たようにそれは作品の実際上の最後の章で実現されているからである。にもかかわらず何故、実現された〈千年王国〉は否定されねばならなかったのか。

至福の庭の場面を振り返ってみよう。するとそこで、「春と秋」、「生の魅惑と死の魅惑」が渾然一体を成す庭の情景が「絵」(Bild)として捉えられていたことが思い起こされる。『Bild』という多義的な言葉が曖昧であるなら、J. Kühneのようにこの庭は「一枚の絵画」(Gemälde)として見るができると言ってもいいだろう。<sup>57)</sup>あるいは更に一步進めて、一枚の静物画として見るができる、と。<sup>58)</sup>そして、「ある夏の日の息吹き」の直前に置かれた章では、まさにそのもの言わぬ絵画、「静物画」について兄妹の対話が交されているのである(R. 51章)。

「静物画」(Stilleben)とは文字通り「静止した生」を意味するものであるが、実際に描かれた静物にはその題材となった事物とは異なるものが表わされている、

とウルリッヒは言う。事物は「芸術の圈内」に呪縛されることによって、「描かれた生の持つ神秘的な魔力」を獲得するのである。その魔力とは、アガーテの表現に従えば、草原のにおいを運んでくるそよ風や昆虫の羽音に充ちた浜辺に立って、沈黙した海を見つめるときに感じるような「幸福な、飽くことを知らぬ哀しみ」をかき立てる力である。これは自然の生から離脱して「静止した生」の中に移行した存在が指し示す、生と死の際立った対照から生まれ出る哀しみだと考えられる。静物画を凝視するとき、そこに描かれた静物が次第に顕わにするのは、それが「生の多彩な岸辺」に佇んでいるさま、つまり静止した世界に移行する以前の生きた自然の中に住まっていたときの姿なのである。もっとも静物画の持つ「神秘的な魔力」とは、そのような生と死の対照からのみ成り立つのではない。死の世界への積極的な加担の側面が、死のテーマを扱う抒情詩との類比によって次のように説明される。数百年来、抒情詩が扱ってきた「棺台に横たえられた恋人」というモチーフは「死の聖化と尊厳」を表現するものであるが、そこには「死が自分に最も高貴な恋人を贈ってくれる」という子供じみた考えが潜んでいる。そのような死への傾斜の底にあるのは、「生身の恋人」を持つことのできない男に共通する「不可能、無力、自然な勇気もしくは自然な生に向かう勇気の欠如」という性格であり、これは医学的心理学的に考察すれば「降霊術と巫術」に、更には「屍姦」にまでつながるものである。静物画にもこれと同じ「自然な生」の欠如が認められるとき、

そして静物画は、その奇妙な魅力はやはりまやかしではないのか。いや、ほとんど靈氣漂う屍姦ではないのか。(1231)

という問いが発せられる。自然の生を離れ、画面に封じ込まれた静物の「神秘的な魔力」がこうして死の世界を呼び醒し、死を愛の対象とさえするとき、静物画はもはや「静止した生」であるに留まらず、フランス語で言う「死せる自然」(nature morte)そのものと化す。そして、「死せる自然」としての静物画に魅入られた者は、死を愛する倒錯の世界に入るのである。

上に見た静物画をめぐる兄妹の対話が直前の章に置かれ、読者はそれを通して「ある夏の日の息吹き」の庭を見ることになる。そのとき、至福の庭の背後にあたかも透絵のように浮かび上がってくるのは、死の庭の相貌である。「色あせた花吹雪」, 「花時をすぎた樹々」, 「葬列」, 「沈黙」, 「死の魅惑」等、死を

表象する言葉に覆われた世界は、明るい初夏の日差しのもとで、その内部から濃い鬩りの色を滲ませているように見える。それは生と死の、光と影のコントラストに基づく影ではなく、影を吸収した光の世界が自らの内部に懐胎する鬩りであり、こうして二元的対立を失った世界は、「葬列」が同時に「自然の祝祭」であり、「死の魅惑」が同時に「生の魅惑」であるような一なる世界へと凝固するのである。このとき時間は過去にも未来にも向かわず、永遠に静止した現在が出現する。永遠の現在に固定された世界が死と呼応し、更には死を愛する静物画の世界に通じることとはもはや言うまでもないだろう。夏の日庭に顕現したく千年王国は、額縁の中に閉ざされた永遠の美＝死のユートピアなのである。

だが何故、あるいはいかにして、至福を約束するはずのく千年王国は静物画の世界に取り込まれてしまったのか。改めて「ある夏の日庭の息吹き」の庭を一枚の静物画として眺めてみることにする。初夏の透明な光を浴びて、庭の中央にウルリッヒとアガーテが横たわっている。二人は黙して頭上を行く花吹雪の葬列を見つめている。画面の横と背景には若葉に覆われた樹々が立ち、樹々もまた沈黙して漂い流れる花びらの行方を追っているかのようである。画面全体を支配しているのは極度の静寂であり、この静寂が極限に達した瞬間、兄妹の心臓は肉体を離れ、花吹雪の葬列に加わっていくように思われる。私たちはこの絵を見て「幸福な、飽くことを知らぬ哀しみ」を感じないだろうか。ここに描かれているのは自然の葬送、あるいはむしろ兄妹自身の葬送である。

M. Menges は静物画の及ぼす作用について、美術史的考察を踏まえて次のように述べている。静物画は元来、ピューリタンの禁欲の教えと結びついていた。触れようとしても実体には触れられぬ静物は、節制と慎しみ、更にはあらゆる生あるものの虚しさに移ろい易さを、見る者に教えるのである。この延長線上に宗教的に動機づけられた「死を想え」(memento mori)のメッセージが賦与される。例えば静物画に描かれた飲みさしのコップは、誰かがたったいま神に召されたことを意味する、というふうに。ムージルの呈示する静物画(R. 51章)もこのような意味連関にあるのであって、日常的な世界における事物との関係は、静物画を前にして「そのグロテスクな虚しさ」を露呈するのである——と。<sup>59)</sup> だがMengesの考えに先立って見たように、一枚の静物画として「ある夏の日庭の息吹き」の庭が私たちに伝えるのは、宗教上のアレゴリーとしての節制と慎しみの教えでもなければ、日常世界の「グロテスクな虚しさ」でもない。逆に、非日常性の極点で生じる透明な哀しみとも呼べるものであった。そしてこの哀しみは、アガーテの

言葉に従うなら、かつて静物が「生の多彩な岸辺」に佇んでいたときの姿が静物画を見つめるほどに鮮かに甦ってくることに由来するのである。であれば、死の庭が伝えるメッセージとは、「死を想え」ではなく、むしろ「生を想え」であるように思える。死の庭の静物と化したウルリッヒとアガーテも、かつてはそのような「生の多彩な岸辺」に佇んでいたのではなかったか。

「一連の不思議な体験」の起点に立ち返ってみよう（Dr. 45章）。するとそこで、ウルリッヒとアガーテの肉体的接触による合一の体験が、一枚の絵の中の出来事として描かれていたことが思い出される。そのきっかけとなったのは、着替えをするアガーテの姿が「絵」（Bild）として捉えられ、「この絵の魅力的な具象性」がその「額縁」を離れてウルリッヒの肉体に移行するという感覚であった。これは視点を相対化するなら、アガーテの絵の世界にウルリッヒの肉体が侵入したのだとも言い換えうる。<sup>60)</sup>であれば、この時点で二人は絵画の世界に一步足を踏み入れたのだと考えられる。ただし、この段階ではその絵はまだ静物画ではなく、アガーテを抱きかかえてのウルリッヒのジャンプに明瞭に示されているように、「驚くべき情熱」を表現しているのである。だがひとたび絵の中に塗り込められた情熱が一瞬の合一の陶醉を持続させようとするとき、それは必然的に永遠の現在たることを志向せずにはいられまい。そして事実、先に見た「白昼の月光」の章では、永遠の現在への過程が進行しているのである。アガーテの見る変容した庭はそこで次のように描かれている。

更に奇妙なことに、あたりのものの姿は皆、無気味なまでに荒涼としていながら、無気味なまでに恍惚として生気を帯びてもいたのだった。これらのものにまさに人間的な官能と感覚を与えていた名づけ難い何ものかが、たった今、それらを見捨ててしまったかのように、優しい死もしくは情欲の果ての仮死にも似た姿で。（1094）

この庭の情景に見て取れるのは、永遠の現在に潜む死の兆しである。一枚の絵に固定された合一の体験は、その起点においては情熱と官能という自然な生の表出であったにもかかわらず、ここで既に風化の過程を歩み始めている。それは極度に純粋化された生、即ち死に到る過程であり、この過程を歩み通したとき、あらゆる動的な要素を排除した「ある夏の日の息吹き」の庭が、静寂の極限の世界を描く静物画として出現するのである。

以上の考察を踏まえるなら、〈千年王国〉の只中に立ったアガーテがその中に住まうことは不可能だと言う理由も理解できるものとなる。静物画の額の中に封印され、それによって永遠化された合一の歓びは、もはや哀しみをもたらすものでしかなく、そのとき永遠の現在に留まり続けることは自然の生からの離脱、即ち「屍姦」に他ならないのである。そして、〈千年王国〉を目指した兄妹の陥ったこの袋小路は、偶然迷い込んだ迷路の一つなどではなく、永遠の相のもとに構想された〈千年王国〉に初めから内在するアポリアなのだ。

第一巻で、ウルリッヒの生きる世界が「数億キログラムの石と化した世界」あるいは「感情の凝固した月の風景」として描かれていたことを思い起こしたい(第34章)。それは完成された既成の世界、即ち第二部の標題に示された「同じようなことが起こる」世界のイメージであるが、この凝固した既成の世界に同化することを拒んで「特性のない男でありたい」(130)と望んだウルリッヒは、第一巻において「可能性感覚」(第4章)、「エッセイ主義」(第62章)等、「力の樹」に集約しうる「懷疑的で客観的な目覚めた態度」(591)を駆使し、所与の現実ならびに同時代の思想を相対化してきた。しかし「力の樹」への傾斜はその対極にある「愛の樹」の不在をウルリッヒに強く意識させ、彼を〈少佐夫人の物語〉への回帰に導く。第二巻で求められる〈千年王国〉は、このように所与の現実と同化できず、現在の自己のあり様に充たされることの無い者が不可避免的に憧れざるを得ない絶対的なユートピアであると言えよう。だがこのユートピアは、ひとたびこれを求めれば、本章でこれまで見てきたようにその絶対性の故に、その内部に潜む永遠への志向性によって、必然的に現実への回路を失い死の世界へと凝固する。それは起点にあった石化した世界、「凝固した月の風景」とは異なる位相に位置づけられるべき性質の凝固ではあろうが、自ら生きた現実とはなりえないという点において両者は同等なのである。永遠のもの、絶対的な境位を求めることがこのようなアポリアを生み、一方〈千年王国〉は小説の中でそのような永遠絶対の世界として予め設定されている。となれば、第二巻における〈千年王国〉への旅は、絶対的な境位を求める神秘主義的志向が不可避免的に陥るこの袋小路を、その内部に隠された論理をすくい取ることによって露呈させるための仕組みではないだろうか。父の死——帰郷——アガーテとの再会——神秘主義をめぐる対話——〈千年王国〉のヴィジョンとその実現、という第二巻の筋立てを振り返るとき、そこに浮かび上がってくるのは互いに内的な連関を保って継起する一連の出来事であり、それらを結ぶ一筋の糸の存在である。この一筋の糸を辿っていった

先に〈千年王国〉の袋小路がある、ということは逆に言えば、〈千年王国〉に向けて辿られたこの一筋の道は、予めその終結点における破局を予定されていると考えられるだろう。そして更に、前章で述べたように〈千年王国〉のヴィジョンに神話的始原世界への回帰という方向性が内包されており、それが同時代の思潮と通底するものであるなら、ウルリッヒとアガーテの辿った破局への道は、聖なる世界を志した者が陥る個人的破局であるにとどまらず、同時代が辿りつつある破局への道とも重なり合う。

W. Raschは第二巻の清書開始時に記されたという次のようなムージルのメモを伝えている。「『別の状態』をめぐる問題圏は、時代と密接に関係づけられねばならない。この問題が理解され、単に一つの異常なことだと見做されないようにするために」。<sup>61)</sup>この言葉は、〈別の状態〉の問題が作家の強い時代意識に支えられていること、言い換えればムージルが〈別の状態〉を時代の現象と結びつけて考えていたことを示している。同じ趣旨の創作メモをいくつか取り出してみよう。

「第二巻の初めから、最上位の観念は戦争。aZの熟考は『非合理的なもの』を解き明かす副次的試みとして、その下位に置かれる」(1843)。「破局へと到った時代の内在的叙述が物語の本来の骨格を形成せねばならない。(…)秩序と確信の追求、aZの役割、知識人の状況等の問題はすべて、時代の問題でもある」(1855)。このような言葉が証するのは、『特性のない男』を時代の書たらしめようとするムージルの強い意思である。その際「時代」とは、小説内部の設定では第一次大戦前夜の1913/14年であるが、作品自体はその枠組みを遙かに越えて1920年代、30年代にまで、即ちムージルが『特性のない男』を執筆していた同時代にまでその射程距離を伸ばしている。このような時代との密接な関連の中で〈別の状態〉の探究が行なわれるとき、小説内で辿られる〈千年王国〉の破綻への道程は、同時代の神話志向のイデオロギーに対する痛烈な批判となろう。第一巻におけるウルリッヒの同時代批判が距離を取った揶揄と嘲笑を基調としていたとすれば、第二巻では、そのウルリッヒをも取り込む非合理的なものの論理が、主人公を神話的始原世界の奥深く遡行させることによって、その根底から内在的に批判されるのである。

ここに私たちは「極めて反革命的」というキッシュの第二巻批判に対してムージルが答えた「もう一つの利用法」という言葉の意味を理解することができる。第二巻で辿られる〈千年王国〉への道は、非合理的なものの論理の内部に潜行するためにあくまで肯定的に描かれねばならず、それが小説全体の中で持つ意味は、

その実現に到る過程と帰結において初めて明らかになるのである。前半部で「極めて反革命的」であるかに見えた第二巻を書くムージルの真意は、同時代の非合理主義に対する内在的批判にこそあったと言わねばならない。

#### Ⅳ

第二巻開始以来の中心主題であり、より広いパースペクティブの中で捉えれば〈少佐夫人の物語〉を不可視の中心とする『特性のない男』全篇の主題ですらあった別の状態の探究は、〈千年王国〉への到達と同時にその破綻を宣せられた。最後に、未完に終わったこの小説がどのような地平に向けて開かれているのかを見ておきたい。

〈千年王国〉の中に住まうことがアガーテによって拒否されて後、「ある夏の日の息吹き」の章は「情熱的に生きるための二つのあり方」、即ち「食欲的なあり方」(die appetithafte Art)と「非食欲的なあり方」(die nicht-appetithafte Art)をめぐる兄妹の対話へと移行していく。「食欲的なあり方」とは、「安息と満足を決して得ることのない『世俗的な』感情の音調」に支えられた生き方であり、これは世界の「錯綜した不安」の要因となると同時に「美と進歩」の原動力ともなる。一方「非食欲的なあり方」は「絶えず共鳴はしているが、決して『完全な現実』となることはない或る『神秘的な』感情の音調」に支えられており、そこで生は「何か不気味な夢」のようになる、と言われる。「非食欲的なあり方」については更に、「植物的なもの」とも「東洋的・非ファウスト的」とも言い換えられるが、その静的な性格が〈千年王国〉におけるあり方を指していることは、静物画についての対話がそこで引き合いに出されていることから明らかであろう。そしてこの二項対立的生のあり方をめぐる対話の中で、「食欲的なあり方」の側面すなわち「衝動、並びに衝動的人間全般の名誉回復」が試みられるとき、そこに見られるのは、静止した〈千年王国〉を動的な地平に向けて乗り越えていこうとする意思の明白な表明である。「千年王国の中へ」という標題を持つ第三部はかくしてここで決定的な転回を遂げ、その内実はむしろ〈千年王国を越えて〉と言うにふさわしいものへと切り換わるのである。

この転回が生み出すはずの小説の新たな局面は、作者の急逝により私たちの読みうる形では残されなかった。だが1941年9月初めに記された次の創作メモは、以後ウルリッヒとアガーテがどのような世界に向かうのかをある程度予測させて

くれるように思う。「クラリッセは今や『行動人』。將軍を通してウルリッヒとアガーテに再び接近しようとする。彼女の『計画』を遂行するためには、つてが必要だから。(…)それは將軍の来訪等で始まり、食欲的／非食欲的のテーマと関わってくる」。<sup>62)</sup> このメモからは、「一連の不思議な体験の始まり」の章以降ほぼ完全に他者との交渉を絶ち、閉ざされた空間の中で「千年王国」へと歩み入った兄妹が、「ある夏の日の息吹き」の章の後ふたたび外部世界に向けて開かれていくことを予定されていた、しかもクラリッセとの関係に向けて開かれていくはずであったことがわかる。ここで言われているクラリッセの「計画」とは、精神病院に収容されたモースブルグラーを救出する計画のことである。第一巻におけるクラリッセは、平行運動に「オーストリア・ニーチェ記念の年」の実施を提案する(第56章)、あるいは「世界の救済者」を受胎するためにウルリッヒに性的関係を迫る(第123章)など、既に狂気を帯びた奇矯な「行動人」の片鱗を示してはいたが、あくまでもウルリッヒを取り巻く副人物たちの一人であった。ところが第二巻に入り「暴力による世界の救済」(834)を説く「預言者マインガスト」(828)を思想的後楯とした後、彼女はウルリッヒから離れ独自の動きを始める。マインガストの意志の哲学から、「狂気は恩寵である」、狂気は高められた意志であるという確信を得たクラリッセは(第26章)、この確信に基づいて自ら狂気の淵へと疾走しつつ、精神病者モースブルグラーの救出に向けて行動を開始するのである。その具体的な行動は第33章の精神病院訪問の場面で途切れたままになっているが、「ある夏の日の息吹き」の章の後、このクラリッセの動きが今度はウルリッヒとアガーテとの関係の中で展開されていくはずだったのであろう。

だが「ある夏の日の息吹き」の章以後の兄妹が他ならぬこのクラリッセとの関係に向けて開かれているという事実は、ただ小説の筋立ての連続性を保証するだけではない。上に述べた第二巻でのクラリッセの変化は、第一巻で重要な役割を演じた他の副人物たちの変化——「魂と経済の結合」(108)を説いていたアルンハイムは軍部と結んでガリシアの油田の確保を狙う商人となり(第13章)、アルンハイムとの「プラント的な魂の共同体」(281)を目指していたディオティーマは、「いきいきとして調和のとれた性愛への道」を求めて今や「結婚の生理学と心理学」を研究している(第17章)。民族主義派の青年運動を指導し、「小市民的世界の破壊」(555)を叫んでいたハンス・ゼップもまた、ゲルダ・フィッシャーと「半公式的に婚約し」、博士号取得のための勉強に励んでいる(第36章)——と比べてひとときわ光彩を放っており、他の人物および出来事が次第に兄妹のく千



年王国へへの旅という求心力を持った流れに吸収されていくのに対し、途切れながらではあるが唯一独立したもう一つの流れを形成している。第二巻のクラリッセは、アルンハイム、ディオティーマ、ハンス・ゼップらが前景から退いた後、ウルリッヒ／アガーテに対抗しうる唯一の重要人物なのである。クラリッセのこのような地位の上昇は、もとより当初から予定されていた。第二巻に着手したばかりの時期である1930年10月19日のメモには、「クラリッセを前面に出す。クラリッセ——マインガスト——モースブルッガーの小説を作る。(…)クラリッセは今や本格的に第二巻の中心人物である」(1377)と記されている。ではクラリッセを第二巻の中心人物として構想したムーゼルは、この人物にどのような役割を担わせようとしたのだろうか。言うまでもなく狂気への疾走がクラリッセの核を成す属性であるが、個人内部の核質としての狂気だけがムーゼルの関心事だったのか。クラリッセの物語が持つ小説全体にとっての意味を自問したムーゼルは、先のメモに続けて自らこう答えている。「クラリッセの内部で入り乱れているものは、時代の内容物である」(1377)。

「異常であり一見して奇矯ですらあるクラリッセの症状さえも、彼女の時代の一般的現象に通じている」<sup>63)</sup> というD. Kühnの指摘を俟つまでもなく、クラリッセの狂気は時代の狂気と密接に結びついている。あるいは、時代に内在していた狂気が狂気の時代として現実の政治現象の表面へと顕在化していく過程で、クラリッセの狂気と時代の狂気はより強く結びつけられていったと言う方が正確かもしれない。クラリッセに関してムーゼルは、既に1920年代半ばに  $s_0$  および  $s_0$  の記号を付したかなりの分量の草案をしたためていた。1929年にそれをまとめ直すにあたって、 $s_0 + b$  と  $s_0 + b + 1$  の一部が書き改められているが、このうち  $s_0 + b$  をもとにして新たに「ローマのクラリッセ」という標題を得た草稿においてムーゼルは、内容上の大きな変更のない中、ローマの空気を吸うクラリッセがその中に「ファシズムの予言」(1373)を感じ取るという一節を付け加えているのである。<sup>64)</sup> このようにしてクラリッセは時代と結びつけられていき、それに比例して作品内の重要度も増していったと考えられる。クラリッセは時代の狂気の体現者なのである。

遺稿部の草稿にまで立ち入らねばならぬクラリッセの狂気についての詳細な考察は、マインガストおよびモースブルッガーとの関わりをも含めて他日を期したい。予め設定した本稿の枠を越えてクラリッセの問題にまで言及したのは、ただ、「ある夏の日の息吹き」の章以後のウルリッヒとアガーテが、クラリッセのはら

む問題圏である狂気の時代との関わりを余儀なくされるであろうことを指摘しておきたかったからである。兄妹が到達した〈千年王国〉はそのような動的な時代の地平に向けて乗り越えられていくはずであった。

だがⅠ章で見たように、〈千年王国〉の背後にその原像としてのく少佐夫人の物語〉を認め、更にその背後に作家ムーヅルにとっての原体験たるヴァレリーエ体験を見るとき、この乗り越えの持つ意味は重い。何故ならこのとき小説内で行なわれたく千年王国〉への旅は、ムーヅルにとって自己の根源への旅でもあっただろうから。しかも〈別の状態〉を詩的に形象化することは、『結びつき』（1911年）以降、作家ムーヅルを本質的に規定する営為であった。〈別の状態〉は「作家ローベルト・ムーヅルのモーター」であった、という本稿の冒頭で引用した1942年の彼自身の言葉は、その意味で文字通りに受け取られるべきである。しかしだからといってW. Bausingerのように、この言葉をもとに、〈別の状態〉が否定的に乗り越えられていくという構想に疑問を呈したり、あるいは更に、ムーヅルの作家としての全営為を「『別の状態』を叙述し、これを詩的に実現すること」に還元したりすることはできまい。<sup>65)</sup>確かに『特性のない男』においても、〈別の状態〉の文章への彫刻には並々ならぬ力が注がれている。わけでも「ある夏の日の息吹き」の庭の叙述はその比類ない結晶度で私たちを魅了するだろう。しかし、にもかかわらず、『特性のない男』の最終的目標はそうなく別の状態〉の詩的实现、ましてやその理想化にはなかった。〈千年王国〉に向かったウルリッヒとアガーテの試みはその最後の段階で否定されねばならず、逆にそうして〈別の状態〉が作品内で否定的に措定されるからこそムーヅルは、以後小説を書き進めるに際しての「モーター」を失い、その喪失を嘆かねばならなかった——私にはそのように思える。

1942年、第二次大戦という世界の破局の予兆と亡命生活における生の不安の中で、〈別の状態〉のユートピアに自らを幽閉できなかったムーヅルは、これまでの作家としての「モーター」を失うことになるにもかかわらず、こうして〈別の状態〉の理想化を否定する。そのときムーヅルの念頭にあったのは、〈千年王国〉を時代の危機に耐えうるものに向けて乗り越えること、〈千年王国〉に代えて時代の現実と拮抗しうる世界を築くこと、ではなかっただろうか。未完の『特性のない男』に託されたムーヅル最後の意思を、私たちは軽んじてはなるまい。

## 付 記

本稿で使用したムージルのテキストは次の通りである。

Gesammelte Werke, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg 1978 :

— I : Der Mann ohne Eigenschaften, Roman. ( GW I と略記 )

— II : Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden. ( GW II と略記 )

Tagebücher, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg, 1976 :

— I : Tagebücher. ( Tgb I と略記 )

— II : Anmerkungen, Anhang, Register. ( Tgb II と略記 )

Briefe 1901— 1942, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg 1981 :

— I : Briefe. ( Bfe I と略記 )

— II : Kommentar und Register.

尚, 引用文末尾の数字はすべてGW I のページ数である。ただし引用した章を明示した場合, 原則としてページ数の表記は省略した。章数は, 第一巻と断ったものを除いて第二巻の章を示している。

## 註

- 1 ) Wilhelm Bausinger: Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman \*Der Mann ohne Eigenschaften\*, Reinbek bei Hamburg 1964, S.109.
- 2 ) GW II, S.1143 f.
- 3 ) Peter-André Alt: Ironie und Krise. Ironisches Erzählen als Form ästhetischer Wahrnehmung in Thomas Manns \*Der Zauberberg\* und Robert Musils \*Der Mann ohne Eigenschaften\*, Frankfurt am Main 1985, S.447.
- 4 ) Kraus Laermann: Eigenschaftslosigkeit. Reflexionen zu Musils Roman \*Der Mann ohne Eigenschaften\*, Stuttgart 1970, S.150 f.
- 5 ) Ebd., S.158.
- 6 ) Dr.+章数は Druckfahnen-Kapitel, R.+章数は Reinschrift-Kapitel の表示である。ムージルが生前に刊行した第二巻第1—38章(1932年)に続くものとして, Dr.39—58章が1937/38年までに書かれた。更にその後晩年に到るまでDr.47章以下の改稿が

行なわれ、R.47-52章が成立した。従って最終的には、第38章の次にDr.39-46章が続き、それにR.47-52章が接続すると考えられる。

- 7) Ernst Kaiser / Eithne Wilkins: Robert Musil. Eine Einführung in das Werk, S.226 ff. とくに S.258 f.
- 8) Bausinger, a. a. O., S.106,及び Elisabeth Albertsen: Ratio und \*Mystik\* im Werk Robert Musils, München 1968, S.116 ff.
- 9) Jürgen C. Thöming: Kommentierte Auswahlbibliographie zu Robert Musil. In: TEXT + KRITIK 21/22 Robert Musil, 2. Aufl., München 1972, S.74.
- 10) Wolfdietrich Rasch: \*Der Mann ohne Eigenschaften\* Eine Interpretation des Romans. In: Robert Musil, Darmstadt 1982, hrsg. von Renate von Heydebrand, S.99 f.
- 11) Bausinger, a. a. O., S.106.
- 12) Dietmar Goltschnigg: Mystische Tradition im Werk Robert Musils, Heidelberg 1974, S.74.
- 13) 「ある夏の日の息吹」の章(R.52章)が完成稿であることについては、Karl Dinklage: Musils Definition des Mannes ohne Eigenschaften und das Ende seines Romans. In: Robert Musil. Studien zu seinem Werk, hrsg. von Karl Dinklage zus. mit Elisabeth Albertsen und Karl Corino, Reinbek bei Hamburg 1970を参照。
- 14) Vgl. Ulf Eisele: Ulrichs Mutter ist doch ein Tintenfaß. Zur Literaturproblematik in Musils \*Mann ohne Eigenschaften\* In: Robert Musil, hrsg. von Heydebrand, a. a. O., S.180 u. 199.
- 15) Tgb I, S.183.
- 16) Vgl. Kaiser / Wilkins, a. a. O., S.195 f.
- 17) Ebd., S.194.
- 18) Helmut Arntzen: Musil-Kommentar zum Roman \*Der Mann ohne Eigenschaften\*, München 1982, S.306.
- 19) 拙論「ある深層の物語の読解——ムージルの『特性のない男』研究のための序説」(『研究報告』第1号, 1985年)。<少佐夫人の物語>とは、第一巻第32章で語られたウルリッヒ若き日の次のような神秘的体験を指す。「彼は風景の中へ沈み込んだ。が、それは言いようのない運ばれでもあった。そして世界が彼の目を踏み越えていくときには、世界の意味が内部から、音のない波となって彼の方へと打ち寄せてきた。彼は世界の心臓部に流れ着いていた。彼から遠く離れた恋人の所までは、すぐ近くの木までと同じだけの隔たりしかなかった。内部感情が空間もなく存在を結びつけた。夢の中で二つの存在がまじり合うことなく通り抜けるように。存在のあらゆる関係が変えられたのである。この状態はしかし、それ以外には何も夢と共有するものはなかった。

明晰な状態であり、明晰な思想にあふれていた。ただその中では、何一つ原因、目的、肉体的欲望によっては動かず、すべてのものは絶えず新たな円環を描いて拡がっていくのであった。噴水が無限の円環を描いて水盤に落ちていくように」。

- 20) Ulrich Karthaus: Der andere Zustand. Zeitstrukturen im Werk Robert Musils, Berlin 1965, S. 117.
- 21) Vgl. Goltschnigg, a. a. O., S. 78 ff.
- 22) Vgl. Norman Cohn: The Pursuit of the Millennium. Revolutionary millenarians and mystical anarchists of the Middle Ages, revised and expanded edition, New York 1977. (江河徹訳『千年王国の追求』紀伊国屋書店, 1978年)
- 23) Ebd., S. 13.
- 24) 註19) 参照。
- 25) Albertsen, a. a. O., S. 108; Goltschnigg, a. a. O., S. 153.
- 26) Heribert Brosthaus: Zur Struktur und Entwicklung des "anderen Zustands" in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften". In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Jg. 39(1965), S. 390.
- 27) 中井久夫『分裂病と人類』東京大学出版会, 1982年, 120頁。
- 28) Bfe I, S. 3.
- 29) Karthaus, a. a. O., S. 154.
- 30) Ebd., S. 142.
- 31) Ernst Bloch: Das Prinzip Hoffnung, Frankfurt am Main 1959, S. 381 ff.
- 32) Vgl. Kaiser / Wilkins, a. a. O., S. 320.
- 33) プラトン全集第5巻, 岩波書店, 1974年, 48頁。
- 34) Werner Fuld: Die Quellen zur Konzeption des "anderen Zustands" in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften". In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Jg. 50 (1976), S. 669 ff.
- 35) Tgb I, S. 138.
- 36) Fuld, a. a. O., S. 672 ff.
- 37) Ebd., S. 674 ff.
- 38) Vgl. Cohn, a. a. O., S. 180.
- 39) Franz von Baader: Sämtliche Werke hrsg. durch einen Verein von Freunden des Verewigten, 14. Band, Leipzig 1851, S. 141.
- 40) Götz Müller: Ideologiekritik und Metasprache in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", München / Salzburg 1972, S. 53.
- 41) 上山安敏『神話と科学』岩波書店, 1984年, 275頁以下。

- 42) Gerhard Plumpe: Die Entdeckung der Vorwelt. In: TEXT + KRITIK 31/32  
Walter Benjamin, 2. Aufl., München 1979, S.23 f.
- 43) 上山, 前掲書, 302 頁。
- 44) Walter Benjamin: Johann Jacob Bachofen. In: TEXT + KRITIK 31/ 32,  
a. a. O., S. 35.
- 45) Tgb II, S.609.
- 46) Cohn, a. a. O., S.108 f.
- 47) Ebd., S.109.
- 48) Ernst Bloch: Erbschaft dieser Zeit, erweiterte Ausgabe, Frankfurt am Main  
1962, S.145.
- 49) Tgb II, S.609. Guillemin はこのいきさつを十年前にさかのぼる話として伝えている  
が, 十年前の1922/23年といえば, 後に『特性のない男』の一部の章に発展する草案  
的な短篇が新聞雑誌に発表されていたにとどまり, 当時「特性のない男」という標題  
もまだ存在していない。この標題が登場するのは早くとも1926年であり, キッシュが  
この標題を知っていたことから考えて, 十年前というのは Guillemin の誇張であると思  
われる。
- 50) Vgl. Müller, a. a. O., S.12 ff.
- 51) Tgb I, S.823.
- 52) Vgl. Kaiser / Wilkins, a. a. O., S.320.
- 53) Brosthaus, a. a. O., S.405 f.
- 54) Vgl. ebd., S. 407.
- 55) Vgl. ebd., S.419.
- 56) Tgb I, S.660.
- 57) Jörg Kühne: Das 'Gleichnis. Studien zur inneren Form von Robert Musils  
Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", Tübingen 1968, S.107.
- 58) Vgl. Ingrid Drevermann: Wirklichkeit und Mystik. In: Sibylle Bauer / Ingrid  
Drevermann: Studien zu Robert Musil, Köln 1966, S.224.
- 59) Martin Menges: Abstrakte Welt und Eigenschaftslosigkeit. Eine Interpretation  
von Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften" unter dem  
Leitbegriff der Abstraktion, Frankfurt am Main 1982, S.178.
- 60) Kühne, a. a. O., S.123.
- 61) Rasch, a. a. O., S.102.
- 62) Albertsen, a. a. O., S.117.
- 63) Dieter Kühn: Analogie und Variation. Zur Analyse von Robert Musils Roman  
"Der Mann ohne Eigenschaften", Bonn 1965, S.58.
- 64) Vgl. Stefan Howald: Ästhetizismus und ästhetische Ideologiekritik. Untersu-

chungen zum Romanwerk Robert Musils, München 1984, S. 245

65) Bausinger, a. a. O., S. 109.